

Title	<翻訳> Ardhā Kathānaka (Ardha Kathā) : Ṭippaṇī : バナーラシーダーサ半生記抄(訳註)下
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	大阪外国語大学学報. 27 p.23-p.39
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80435">https://hdl.handle.net/11094/80435</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Ardha Kathānaka (Ardha Kathā): Tīpṇaṇī

バナールシーダーサ半生記抄（訳註）下

古 賀 勝 郎

また一度は、ジョーギー<sup>(64)</sup>にかつがれたことがございました。祈禱用具ともども法螺貝をくれて、<sup>(219)</sup>「これはサダーシヴァの像<sup>(65)</sup>なるぞ。これを拝む者は極樂（シヴァ神の天界）に到るのじゃ」と申すものですからこちらは夢中になり、毎日欠かさず真心こめて拝みました。<sup>(220)</sup>法螺貝の御姿の神像を洗い清め、心に堅く念じての祈禱とともに神の御名を百八遍となえては喜悅に浸っておりました。<sup>(231)</sup>食事前には必らず祈禱をすませることにしておりました。<sup>(222)</sup>かように久しく人知れずシヴァ神を拝んでおったのでございます。さて、Vi. 1661年（1604 A・D）のチャイタ月の白半の2日のこと。<sup>(223)</sup>サリーム王子の御用達を承るヒーラーナンダ・ムキーム<sup>(66)</sup>は巨万の富をもってなるオースワラの宝石商でございましたが、<sup>(224)</sup>プレーヤーガからガンジス河を渡ってのパーラサナータ山への巡礼講を募りました。<sup>(225)</sup>各地に出された回状が父のカラガセーナのもとへもまいりました。<sup>(226)</sup>ので父は家族を伴わず、独り馬に乗りヒーラーナンダのもとへ伺いました。<sup>(227)</sup>父が巡礼講に加わって家を留守にしたのを幸いに気儘になった手前は、己れもパーラサナータ山へお参りに行きたいと言い張っては母との間にいさかいばかり起こしておりました。<sup>(228)</sup>凝乳、牛乳、ギー、米、ひよこ豆、油、パーンなどをすぐさま断ち、子供のような意地で願をかけたのでございます。<sup>(229)</sup>この願をかけたのがチャイタ月のこと。6、7ヶ月ほどしてカールティカ月になりますと、世間の人々はみな巡礼に出かけ始めるのでございます。<sup>(230)</sup>シヴァ派の信徒は沐浴に、ジャイナ教徒はパーラサナータ詣でにというわけで、手前もそれに加わって<sup>(231)</sup>カーシー（バナールス）へ行き、まずはじめにガンジス河に沐浴し、パーラサナータ、スパールシュヴァナータの両ティルトンカラを心行くまで拝み<sup>(232)</sup>、願かけに食断ちしていた品々を買い求め、お供え致しました。<sup>(233)</sup>そこには十日間逗留し、毎日早朝に寺院に詣でました。<sup>(234)</sup>かように心からの礼拝をすませ、白い法螺貝を手に家に戻って参りました。<sup>(235)</sup>食事前には必ずこれを拝むばかりか、家にあるが旅にあるが片時も忘れはしませんでした。<sup>(236)</sup>この間、手前は男の子を授かりましたが、その子は得難い人の身を授かりながらすぐにこの世を去りました。<sup>(240)</sup>ところで、Vi. 1662年（1605 A・D）のカールティカ月の9日にアクバル大王がアグラでおかぐれになったのでございます。<sup>(240)</sup>この報がジャウナプラに伝わりますと、民は頼む主を失なったとばかり、先々の不安におののき、気は動転し、顔色をなくしてしまいました。<sup>(247)</sup>上樞に腰をおろしておりました手前は思いがけずこの報に接したとたん驚きのあまり、ほうぜんとし、<sup>(248)</sup>目がくらんでわが身を支えておれず、床に転げおちました。したたか打ちつけた額からは血汐が流れましたが、口ではた

だ「主」<sup>デーヅ</sup>と叫んだきりでございました<sup>○(249)</sup>床に打ちつけて負うた傷のため、戸口は血に染まり、家族の者たちはあわてふためき、父母もおろおろいたしました<sup>○(250)</sup>母は手前を膝に抱き、龍涎香を燃やしてその灰を傷口につけました。さらに寝台に休ませはしたものの、母の目からはとめどもなく涙が流れ落ちるのでございました<sup>○(251)</sup>一方、この最中、街中が大騒ぎになり、どの家も鋸戸をおろし、商人も店をみな閉めてしまいました<sup>○(252)</sup>衣類や装身具など高価なものはみな地に埋め、金銀は別の場所に、現金やその他の品々はまた別の安全な場所にかくしました<sup>○(253)</sup>みなそれぞれに刀剣の用意をし、だれもかれもむさくしい衣服や毛布、あるいは、粗末な綿布<sup>デーヅ</sup>をまとい、女たちも粗末な布にくるまってしまったものですから、<sup>(254)</sup>貴賤、貧富みな同じような姿になり見わけもつきません。けれども懸念された押入りや盗賊は一向に現われませんでした。ただ、わけもなくおびえていたような次第でした<sup>○(255)</sup>十日余り続いた騒ぎもようやくおさまリ、また元通り平穏になりました。皇帝がおかくれになってからの詳しい様子は後に知らせがあって判ったようなことでございます<sup>○(256)</sup>アクバル大王は52年の長きに亘り善政を布かれたのですが、1662年のカールティカ月におかくれになりました<sup>○(257)</sup>サリーム王子が王位を継がれることになり、<sup>(258)</sup>名もヌールディーン・ジャハーンギール・スルターンとお改めになりました。その御威光もやはり全土に及びました<sup>○(259)</sup>このようなことでお触れがでますと、ジャウナブラの街にも喜びの声があふれたのでございます<sup>○(260)</sup>わが家も落ち着きを取り戻し、手前も齋戒沐浴をして、お祝いに喜捨を致しました<sup>○(261)</sup>ある日のこと、独り家にいますと気にかかることがございます。手前はこれまでシヴァ神を如何ほど拜んで参ったか知れぬのに、<sup>(262)</sup>失心して床に転げ落ちる際にシヴァ神は少しもお助け下さらなかったではございせんか。さように考えれば、シヴァ神を拜んでいたのは誤りであったと気づき、お祈りを捧げるのをやめました<sup>○(263)</sup>それからは法螺貝も片隅におしやってしまったのでございます<sup>○(264)</sup>

ある日のこと、仲間と一緒に、詠んで間もない詩歌の書き記したものを手にして<sup>(264)</sup>ゴーマティー川に出かけました。橋に腰をおろして詠みあげてみますと、しみじみと感ずることがございます<sup>○(265)</sup>人は、たとえ一言であろうとも嘘を吐けば、その果として地獄の責苦をうけると申すのに、これまで己れは飽きもせず如何ほど嘘言を吐いてきたことであろうか。かけらほどの真実もなかったではないか<sup>○(266)</sup>これでは後生もおぼつかぬ。かようなことをふと考え込んだのでございます。しばらくは川面をみつめておりましたが、ついに己れが筆で書き記した紙を芥屑のように川に投げ捨てました<sup>○(267)</sup>友は驚きの声をあげましたが、深く恐ろしい川のこととて、散乱した紙を拾い集める人があろうはずもございせん<sup>○(268)</sup>しばし仲間たちは大変惜しんでおりましたが、業果とは不可思議なものと語りあって別れを告げ、帰宅したのでございます<sup>○(269)</sup>父はこのことを知ると心中ひそかに喜んだ様子でございました。息子にもついにこのような分別が付き、家業を継げるようになってきた、と考えたのでございます<sup>○(270)</sup>それ以来、手前は人倫を尊び、好いたはれたもやめにして、家業に励むことに致しました<sup>○(271)</sup>人は他人に言い聞かされて自省するものではございません。年頃ともなれば子供らしさも自ずと消え失せるように、その齢に達すれ

ば自ら覚るようになるものだと思ひます。(272) 善根をつめば来世で楽を、悪業を重ねれば苦を享けるは必定と悟り、ようやく人倫の道を歩むようになったのでございます。(273) 早朝起きると直ちに寺院に詣でるのが日課になり十四の誓戒、サーマーイカ・バリコーナーを行なっておりました。(274) かくしてジャイナ教の教えに日夜親しむようになったのでございます。人の運命とはわからぬもの、先々のことまで見透す人はございせん。(275) かつては悪名をうたわれた手前が、人様にほめられるようになろうとは。やがて Vi. 1664年になりましたが、その年のことを申してみましよう。(277)

手前には妹が二人あり、すぐ下の妹はジャウナプラに嫁ぎ、末の妹はまだ嫁がずにおりました。(278) その妹が、この年のフェーグナ月にパーダリプラ<sup>68</sup>に嫁いだものですから、父も肩の荷を下ろしたような次第でした。(279) また、手前は二人目の男子を授かったのですが、その子は鳥籠から脱け出た小鳥のように、人の身を遣してこの世から飛び去ってしまったのでございます。(280) 嬉しいことと悲しいことともども三年の月日が流れ、父は伴が頼もしくなってきたのをみてひそかに喜んでおりました。(281)

1667年(1610A・D)のこと、父は家財をかきあつめて仕入れを致しました。それぞれの値は紙に書き記してくれました。宝石ははめこみもあれば、石のままのものもあり、<sup>ブッガー</sup>(282) 腕輪二つに指環を2個、紅玉24個、真珠34個、青玉9個、緑柱玉20個、等々の宝石類、(283) 次にギー20マン、油を皮袋に2杯分、それにジャウナプラで絹織物を買込みました。その元手に金子200ムドラーを要しました。(284) わが家の財産をかき集めたのですが、それでも足らず、不足分は借金で間に合わせ、どうにか品を整えました。父は、思案をしてから(285) 手前をよびよせ、「この品をみなアーグラへ持って行き、商うがよい。(286) もうこれからはお前がこの一家を背負って立ち、養っていくのじゃ」と語り、手前の額にティラカをつけてくれたのでございます。(287) 荷物は車に積みこみ、宝石類は腹巻の中に大切にしまいこんで出立致しました。(288) 多くの車と一緒に一日5コース(一コースは約2マイル)進み、イターワーの近くに出ました。(289) アーグラに着いた日もまた雨とぬかるみになりました。衣類、油、ギーは川向うにおき、体一つヤムナー河を越えました。(290) 街の一体どの方角に行けばよいのやらと考えたあげく、モーティーカトラー町に向かって歩き出しました。(291) そこのチャープシーの家の近くにいる妹婿のバンディーダーサは、なかなかよい人だときいていたものですから、即刻そこへ訪ねて行きました。(292) その後、間もなく家を一軒かりて衣類をそこへ移しました。(293) 毎日市場へ出かけては衣類を売り払い、差引勘定してみたところ欠損になっておりました。(294) 他日、川向うに置いてあったギーも油もみな売り払ってみたところ、4ルピーの儲けとなりましたが、(295) 代価は手形払いになりました。しかし、さようなことという手前にはなにもかもわからぬことばかりでございました。ともかく、そのような品を売り払って、今度は宝石の商いにとりかかりました。(296) こちらはアーグラの商法にはうとい田舎者。運勢は悪くなる一方で、商いも左前。(297) 帯がちぎれたために、(298) それにしまっておいた石のままの宝石をみな失ってしまいました。痛手ではございましたが、それはだれにも話さずにおり

ました<sup>○(320)</sup> 紅玉を腰帯の端にしまっておいたのですが、衣紋掛けにかけてあった間にねずみにくいちぎられていたのでございます<sup>○(321)</sup> かように前世の業果が現われ、大変な発熱のため全く絶食するほどの苦しみでございました<sup>○(325)</sup> ようやくこなれのよい食事をとり、恢復したものの、ひと月の間は市場に行かずじまいでした。父からしげしげと来る便りにも何一つ返事を出さずにいたところ、<sup>(326)</sup> ドゥーラハサーフの息子で妹婿(?)にあたるウッタマチャンダが、<sup>(327)</sup> 手前が元手をなくして乞食同然になっている旨を故郷へ書き送ったものですから、<sup>(328)</sup> それを聞き知った父は深く嘆き悲しんで家に戻りひどく騒ぎたてたのでありました<sup>○(329)</sup> 母と口争いをするやら悔むやら、はては溜息ついてふさぎこむという始末。その間に手前の妻はカイラーバーダの実家に帰らせました<sup>○(332)</sup> 一方アグラー暮らしの手前は持ち物を一つ一つ手放しての売り食い生活<sup>○(333)</sup> がらくたのものなにもかもありとあらゆるものを食べつくし、金子もすっかり使いはたして、残金は3、4タカーとなりました<sup>○(334)</sup> それからは市場にも行かず家にひきこもり、(?)『マドゥマーラティー』と『ムリガヴァティー』との2冊を<sup>(70)</sup><sup>(335)</sup> 毎夕集まってくる15人ばかりの男たちに読誦して聞かせておりました。男たちは歌ったり、語り合ったりしては礼を言って戻ってゆくのですが、<sup>(336)</sup> 手前は朝起きてでも食うものすらない身の上。いつも物語を聴きにくる男たちの中にカチョーリー売りが一人いたものですから、<sup>(337)</sup> その男の店でカチョーリーを1セール(約900グラム)付買いし、朝夕食べることにしておりました<sup>○(338)</sup> 食物と言えはそれだけで、時折、市場へ出てみたりしましたが、窮状はだれにも打ち明けずに過ごしておりました<sup>○(339)</sup> 専ら付け勘定のカチョーリー売りの厄介になっていたのですが、ある日、店には他に客のいないのを見とどけてから、「これまで久しく付けで食べさせていただいたが、もうやめにしてくれ。済まぬが、払おうにも懐中無一文なので」と、その男にありのままを打ち明けたところ、<sup>(340)―(341)</sup> 男は「付けが20ルピーになるまでは食べていただいてもかまいません。旦那のことをとやかく言う人はおりませんし、だれに気がねすることもございませんから、御気に召すようになさって下さい」と申しました。<sup>(342)</sup> そこで引きさがりましたが、だれにもそのことは気づかれませんでした。そうして物語を語ってきかせているうちに半年以上も経ってしまいました<sup>○(343)</sup> ある日のこと、夕暮れ時に、パルパタ・ターンビの伴で家内の叔父にあたるターラーチャンダ・ターンビ<sup>(344)</sup> が訪ねて参りました。皆物語が聞いている間は黙って座っておりましたが、<sup>(345)</sup> 人が皆帰ってしまうと、やさしく、<sup>(346)</sup> 「明朝、迎えにくるから、食事はわたしの家ですがよい。よいか、必ずだぞ」と申しました<sup>○(347)</sup> その夜はそのまま帰って行きましたが、翌朝、昨夕の言葉を繰り返しますのでそれに従うことにしました<sup>○(348)</sup> その間、ターラーチャンダは一策を講じていたのでありました<sup>○(349)</sup> 人を遣して手前に代って滞っていた家賃を払ってくれ、残っていたがらくたをもって来させました。そして手前には丁重に、<sup>(350)</sup> 「どうかわたしの家に一緒にいてくれ。もうあの家にはもどらぬように」と言葉をかけてくれました。そうして私をどうしてもと引き留めましたので、手前は食事をそこでいただくようになりました<sup>○(351)</sup>

そうこうしているうちに2ヶ月が経ち、今度はダラマダーサと組んで共同商いを始めることに

なりました。ダラマダーサはデリーのオースワラのアマラシーとジャスーの二兄弟の<sup>(352)</sup>弟、すなわちジャスーの道楽息子で、よからぬ者共と付き合い、麻薬をひどくのむ男でした。<sup>(71)</sup><sup>(353)</sup>それで親が、手前と組ませて商いをするようにと、元手に五百ムドラーを出資してくれたのでございます。<sup>(354)</sup>二人してア－グラ－中を軒毎に歩きまわり夕方家に戻るといことで、紅玉、真珠を仕入れては売りさばき、<sup>(355)</sup>毎日、記録をつけ、帳簿にも書き込み、客の信用も得て名も知られるようになりました。なんとかやり繰りして行けるようになったものですから、件のカチョーリー売りに借金を返済しました。<sup>(356)</sup>ちょうど14ルピーになっていたのですが、3回に分けて一文の不足もなくすっかり支払ったものですから、カチョーリー売りの男は大喜びしました。<sup>(357)</sup>二年間、商いを続けましたが、カイラーバーダの実家にいる妻のことが気がかりでなくなってきたものですから、<sup>(358)</sup>ある日のことジャスーサーフのもとへ行き、カイラーバーダへ行くので、出資分を差し引いて清算してくれるように申しますと、<sup>(359)</sup>サーフからは現品をみな売りさばき現金で支払うようにとの返事がありました。<sup>(360)</sup>その通りにして、500ムドラーを支払いました。<sup>(361)</sup>二年の間に、200以上も儲け市場での商いも調子よくいったのですが、<sup>(362)</sup>Vi. 1670年に勘定を清算して共同商いをきっぱりやめに致しました。<sup>(363)</sup>差引きしてみると、稼いだだけは食べてしまったわけで、懐中には一文も残りませんでした。<sup>(364)</sup>とっておきの金子をもって東部に向かって出立し、歩きに歩き、妻の里のカイラーバーダに辿り着きました。<sup>(370)</sup>舅のカルヤーナマラの家に着いたのは夕刻でした。夜、妻が側へ来て、ア－グラ－での様子を問うものですから<sup>(371)</sup>出鱈目のことを申しますと、妻は、それはまことの話ではございませんでしょう。と問い返しました。仕方なく、実を言えば、<sup>(372)</sup>稼いだ金もすっかり使い果してしまって、懐中には一文もない、と打明けました。妻の申しますには、「苦といい、楽といい、いずれも天から授かるものでございます。<sup>(373)</sup>時が経てば苦は楽に、楽は苦に変わるのだと申します。この世はとかくわが意の儘にはなりません。人はそれぞれ自分の積み重ねた善・悪の業に従いその果をうけるのでございましょう。」<sup>(374)</sup>そうしてア－グラ－のことを語っているうちにその夜は明けてしまいました。妻は家人に内証で20ルピーを持ってきて、<sup>(375)</sup>「これはわたしが貯めておいた金子でございます。今お役に立てば嬉しうございます。妻は主人が息災なだけで満足なのでございますから」とその金を差出しました。<sup>(376)</sup>それから妻は母親のもとへ行き、内証のことまで打ち明けて、「母上、どなたにも話さずにおいて下さいませ。娘のお願いでございます。<sup>(377)</sup>どうか、この2、3日のうちに主人に意見をなさって下さいませ。そうでないと、主人はまたいづくへか立ち去ってしまいましょう」と申しました。<sup>(378)</sup>姑は、「お前の旦那は男のくせに大変なにはかみやのようだね。でも、なにも心配することはない。手許に200ムドラーがあるから、<sup>(379)</sup>もし、お前の婿にもう一度ア－グラ－へ戻ってみる気があるのなら、出してあげてもよいが」と申しました。妻は母に礼を言い、「夜、主人にそれをたずねてみます」と答えたのでございました。<sup>(380)</sup>夜、妻が、「あなたはここに住まわれるおつもりですか。それとも商いをなさるおつもりですか」と尋ねるものですから、<sup>(381)</sup>「お前と一緒にジャウナプラへ行こうと思う」と答えますと、「ジャウナプラはとても物騒でございま

す<sup>○(382)</sup> アーグラへお戻りになるおつもりはございませんか。アーグラの外にはどこもふさわしいところもございませんまい」と妻の言葉。そこで「まあこちらの言い分もきいてくれ。金も持たずに暮らすのはこりごりだ」と申しますと、<sup>(383)</sup> 妻は、「金子はこちらで用意してございますから、また商いをはじめて下さいませ」と励まし、金子を手渡してくれました。このことは、胸に秘めて今までだれにも話したことはございません<sup>○(384)</sup> これほどまでもしてくれるものかと手前は再び元気づけられ、商いの品として、衣類を仕入れて洗いにだし、真珠、宝石を買い入れました<sup>○(385)</sup> 衣類や真珠の首飾りの準備も出来たので、アグハナ月の白半の12日にアーグラへ向けて出発致しました<sup>○(388)</sup>

今度はアーグラのバルページ・カトラに荷を降ろしました<sup>○(389)</sup> 食事はそこにある妻の叔父の家で済ませ、夜は自分の宿に戻り、朝起きては市場に出かけることにしておりました<sup>○(390)</sup> 懸命に力を尽してみたのですが、衣類は品がよくないものですから一向に売れゆきは芳しくなく、この先、どういう運命が待っているのかわからぬというような有様でございました<sup>○(391)</sup> ところが、40ムドラーで仕入れた首飾りが70ムドラーに売れて30ムドラーの利益となったものですから、<sup>(392)</sup> これならばやはり宝石を商う方が割がよい、と考えました。7割5分の口銭ですから、衣類を扱うのはやめに致そうということになりました<sup>○(393)</sup>

バーニーダーサ・コーブラの俵でナローッタマ・ダーサという男、それにもう一人のバダリヤー・ターナと手前を入れた3人組は、夜昼となく寄り集まっては遊んだものでございます<sup>○(394—395)</sup> 車でカウラ<sup>(72)</sup>へ3人揃って詣でに行き、手を合わせ、<sup>(396)</sup> 「どうか手前共に金儲けをさせて下さいませ。もしも願いを叶えて下さいますならば、またお参り致します」と申しました<sup>○(397)</sup> フェグナの月にバーラチャンドの結婚行列が出ました。ターラーチャンド・モーティヤーが、<sup>(399)</sup> 手前を行列に加わるよう誘うものですから、<sup>(400)</sup> なんとか金を工面して出立の用意を整え、ナローッタマ・ダーサと一緒に出かけたのでございました<sup>○(401)</sup> 戻って来た時には金はすっかり使い果たしてしまいました<sup>○(402)</sup> ナローッタマの家に行き食事をよばれ話をしておりますと、<sup>(403)</sup> ナローッタマが、「お前はこの家におればよいではないか。兄弟も同然の間柄、お互い気心の知れた仲だから言うのだが」と申します<sup>○(404)</sup> 「いや、そういうわけにはまいらぬ」と、手前が申ししましても、「しかし、この家にはお前にとやかく言うような者は一人もないはず」と言って、ナローッタマは、<sup>(405)</sup> どうしても引き留めたのでございました。

ある日のこと、ナローッタマがターラーチャンド・モーティヤーを訪ねてみますと、<sup>(406)</sup> ターラーチャンド・モーティヤーが、ナローッタマに熱心に手前と一緒にパートナーに商いに行くようにすすめ、その場で金子を出してくれ、ティーカーをつけてくれました<sup>○(407)</sup> シュリーマラーの男3人が、手下は一人も連れずに吉日を選んで車に乗って出発しました<sup>○(408)</sup> 3人と申しますのは、ナローッタマの外舅とナローッタマ、それに手前ことバナーラシーダーサ<sup>○(409)</sup> フィーローザーバーダ<sup>(73)</sup> からサーヒザーダプラに出て車を降り、それから先は徒歩になりました。<sup>(410)</sup> 車代を支払い、夕方旅籠に泊まりました。それから先には車を用いず、苦力を一人傭い入れました<sup>○(411)</sup> 手前

どもは夜の 10 時半過ぎに、月明りにだまされて、夜明けと間違え歩き出しました。荷物は苦力が頭に載せて出発したのですが、<sup>(413)</sup> ひどく無気味な所に迷いこんだものですから、苦力は泣き出し、荷物を投げ捨てて逃げ去ってしまいました。手前共の他には人の気配は全くございません。<sup>(414)</sup> そこで 3 人相談の末、荷物を 3 つに分けてそれぞれ担ぐことにしました。<sup>(415)</sup> 肩に担いだり、頭に載せてみたり、これも天から授った災難とあれば仕方がございません。真夜中を過ぎた頃には泣き声を出しているかと思えば、次の瞬間には歌を歌ったりしているような様になりました。<sup>(416)</sup> さんざん歩いてやっと辿りついた所が、なんと、盗賊共の部落でございました。男が一人、誰何します。手前共 3 人は顔色を失い、口をつぐみ、<sup>(417)</sup> 神様を念じました。その男がその盗賊たちの頭目でございました。そこで手前が、サンスクリットの頌句を<sup>(74)</sup> 唱えますと、男はうやうやしく挨拶致しましたので、祝福の言葉をかけてやりました。<sup>(418)</sup> 男は、「ブラーフマンの方々、手前どもの家にお休み下され。手前共の力の及ぶことならばなんなりともお申しつけ下され」と申して先に立って案内してくれました。<sup>(419)</sup> 男について行くわれら 3 人の胸のうちは大いに不安で、顔は蒼ざめておりました。<sup>(420)</sup> そこで 3 人は着物の糸を抜き取って紐をより、<sup>(75)</sup> 聖紐を<sup>(74)</sup> 4 本こしらえ、それぞれ一本づつ身につけ、残りの一本は藏っておきました。<sup>(421)</sup> 土を唾でこねて、三人それぞれ額にティーカーをつけ、ブラーフマンの姿を装ったのでございます。<sup>(422)</sup> 夜の明けるまで横にもならず坐っておりました。するとその頭目が馬に乗り、手下を 20 人ほど引き連れてやって来ました。<sup>(423)</sup> 男たちは合掌し、手前共の前にひれ伏すものですから、祝福の言葉をかけてやりました。頭目が道を案内致しますと申すので、<sup>(424)</sup> 仕方なく、それについて森の中を 3 コース（1 コース約 2 哩）ほど、額にはティラカ、首にはジャネーウー、頭には荷物という姿で進みました。<sup>(425)</sup> 頭目はファテープラに出る道を教えてくれて、「この道を行かれるがよろしかろう。この森の先にファテープラがござる。では、手前はここで失礼致しましょう」と別れを告げました、3 人は、「汝らの長生きを祈ってつかわす」と祝福の言葉をかけてやりました。2 コース歩むとラクラーン村がみえ、更に 2 コース進むとファテープラに出たのでございました。<sup>(426-427)</sup> ファテープラで一休みした後、今度は苦力を 2 人傭い、ファテープラから更に 6 コース歩んでイラーハーバーサに出ました。<sup>(428)</sup> 旅籠に宿をとり、ガンジス河の岸辺で食事しました。それから手前は市中に赴き、父に会いました。<sup>(429)</sup> 駆け寄って足下にひれ伏し挨拶致しますと、父は手前を抱きしめてくれました。2 人きりのところで、父はこれまでのことをたずねるものですから、いきさつを話しました。<sup>(430)</sup> 父はそれを聞くとあまりの悲しみにその場に卒倒してしまいました。再会の喜びも一瞬にして悲しみに変わったのでございました。<sup>(431)</sup> しかし、2 時間ほどすると、正気に戻りました。手前とナローッタマはイラーハーバーサでやとった駕籠で、<sup>(432)</sup> 父は馬で、ガンジス河を渡ってからは 3 人とも徒歩でジャウナプラへ向かいました。<sup>(433)</sup> それからナローッタマと手前の 2 人は商いを求めてバナーラサへ赴きました。バナーラサではパールシュヴァナータに参詣しました。<sup>(434)</sup> それは、1671 年（1614 A・D）のバイサーカ月の白半のことで、心ゆくまでお祈りを致したのでございました。<sup>(435)</sup> さて…そこへ父からの便りがございました。<sup>(436)</sup> それにはなんとも、大変



な知らせが記されていたのでございます。と申しますのは、手前の家内はカイラーバーダの実家にいたのですが、<sup>(440)</sup> 3人目の男子を生んで大喜びしたのも束の間、半月後には母子ともどもにこの世を去ったというのでございます。<sup>(441)</sup> ところで、この家内には妹がおりましたが、親や縁者が相談した結果、その妹を手前の後妻にすることになり、床屋がナーリヤル<sup>ナーリヤル</sup><sup>(79)</sup>を持って婚約の挨拶に来たので、それを吉日吉刻に受けとった、とも書き添えてありました。<sup>(442)</sup> この火と水のような悲喜ともどもの話を一時に知らされた手前はしばし呆然となったのでございました。<sup>(443)</sup> これを読んだ友も手前と悲しみを分かちあってくれました。手前はさめざめと泣きましたが、常ならぬこの世の姿をわが胸に言いかせてようやく涙をこらえたのでございました。<sup>(444)</sup>

2人は再び仕事にかかり、紅玉や真珠、緑玉などの商いを致しておりました。<sup>(445)</sup> ジャウナブラとバナラサで2人いつも一緒に仕事に励み、昼食も昼下がりに済ませるような仕事振りでした。こうして6、7ヶ月も経ちますと、心に平静を取り戻しました。<sup>(447)</sup>

ところで、天から降りかかってきたような事件が手前の身の上に生じたのでございます。すなわち、チーニー・キリーチからサローパー<sup>(78)</sup>を賜ったのでございます。<sup>(448)</sup> この方はキリーチ・カーンの御曹子でございましたが、4千の禄を得ており、ジャウナブラの富豪・慈善家であったばかりか文武両道に秀でておられました。<sup>(449)</sup> この方とのとりあわせは奇妙なものでございましたが、この方は手前にお情をかけて下さいますし、手前はこの方を友のように考えておりました。<sup>(450)</sup> かようなわけでいろいろな事があり、かなりの月日が経ちました。ところが業果とは恐ろしいもので、手前を仇と狙う男が1人現われました。この男には実にお話しにならぬほどひどい目に遭わされました。まあこのようなひどいことをする人はこの世に2人といえますまい。<sup>(452)</sup> 手前とナローッタマの2人はこの男にさんざんな目にあわされたばかりか金子までまきあげられました。<sup>(453)</sup> この間ふた月ほど、キリーチ・カーンは、何処へか行っていたのでございますが、戦に勝って戻って来ると、また手前に親しくしてくれました。<sup>(454)</sup> 手前は『ナーマ・マーラー』や『シュルタ・ボード』を読んできかせたりしました。常に変わらぬ好意を示してくれ、<sup>(455)</sup> 件のことについても、何も申さずにいたのですが、それを聞き知ると、四人の人を仲にたててくれて始末をつけてくれました。<sup>(456)</sup> いさかいもなくなり、ちょうど畏にかかった鳥が逃れ出た時のような嬉しい気分を味わいました。しかし、チーニー・キリーチは Vi. 1672年に亡くなりました。<sup>(457)</sup> また、ナローッタマと手前とはパートナーへ仕事にでかけたのですが、労のみ多く、商いはわずかしかなしえず、<sup>(458)</sup> ジャウナブラへ戻ったのでございました。商いの大半は同地で致したようなわけですが、内証のことは申し上げるのは止めておきましょう。<sup>(459)</sup> 人の齡、富、家庭生活、布施、名譽、恥辱、薬石、交接、呪文といったこの9つの事柄については人に語るべきではないとされておりますが、<sup>(460)</sup> これもその中の一つにあたりますので申さぬことに致します。パートナー、バナラサ、ジャウナブラで善いこと悪いことさまざまなことを致しました。<sup>(461)</sup> ともかく2年の間この三つの都市で過ごしたのですが、また厄介な事態が生じました。と申しますのは、アーガーヌールという将<sup>フムクーク</sup>軍<sup>シャー</sup>が皇帝にシルパーオを賜わり、<sup>(462)</sup> とりたてられて来るということで騒然となり、皆、街か

ら逃げ出しました。友と2人で、ジャウナプラへ来てみますと、<sup>(463)</sup> 家族の者はいずこへかかくれてしまっておりましたので、手前と友は棍棒を手にして徒歩で北に向かいました。<sup>(464)</sup> アヨーディヤーに出ましたが、そこには立ち止まらずにローナーヒー<sup>(77)</sup>に行き、ダルマナータを拝みました。<sup>(465)</sup> 7日の間かくれておりましたが、また家に戻る途中耳にした話では、アーガーヌールはバナラサとジャウナプラの間で大変な騒動をまきおこして、大勢の人を半殺しの目に遭わせたのでありました。<sup>(467)</sup> 手前共は、これを聞くと怖れおののき、<sup>(470)</sup> ジャウナプラに戻りかけていたのを取止め、かめ筏<sup>(78)</sup>に乗って川を渡り、森の中の小屋にかくれておりました。<sup>(471)</sup> 40日の間そのようにしておりましたが、また事態が変わりました。アーガーヌールは捕えていた人たちを釈放してアーグラへ行きました。<sup>(472)</sup> 2、3の富豪をひどく苦しめ、縛り上げて連れ去ったという話でございました。かような所行には天<sup>ジナーク</sup>が正邪の判断を下されるのでございます。<sup>(473)</sup>

かくして不安が失せたものですから家に戻り家族一同、互いの無事を確かめたのでございました。そこへネーミダーサ・サーフの伴のサバラシンガ・モーティヤールから手紙が届きました。<sup>(474)</sup> それには、共同商いをしている手前どもに、<sup>(475)</sup> 東部から引揚げて自分のもとへ来るように、とありました。<sup>(476)</sup> ナローッタマは父親からそれとは別に私信を受け取ったものですから独り読んでおりましたが、<sup>(477)</sup> 読み終えるとその便りを手前に手渡して「かようなことを書いてよこしたが、ひとつ読んでみてくれ」と申しました。<sup>(478)</sup> 10行ばかりの書状でございましたが、安否を問うたあと、<sup>(479)</sup> カラガセーナとバナラシーダーサの親子はそろって本性はなかなか現わさぬから油断するでない。<sup>(480)</sup> 悪くすると食いものにされて乞食をしなければならぬから、要心するがよい、と記してありました。<sup>(481)</sup> 手前が気にもとめず読みおえますとナローッタマは手を合わせ、手前の足下にひれ伏して、<sup>(482)</sup> 「お前とわたしは兄弟も同然の仲。わたしの気持はわかってくれよう。なんとおろかしいことを書いてよこしたのか。」と、申しました。<sup>(483)</sup> それからはかえってこれまで以上に親密になったようなわけでございます。やがて、アーグラへ戻る準備にとりかかりました。<sup>(487)</sup> ところが、父が病いに例れたものですから医者に診てもらいました。また、恢復祈願に食物の<sup>ラーハナ</sup>贈物もしかるべきところへ致しました。<sup>(488)</sup> 1673年(1616A・D)のバイシャーカ月の白半の7日、共同商いの清算をして現品はすべて分け、<sup>(489)</sup> 帳簿も別々に致しました。ナローッタマはアーグラへ向かいましたが、手前はジャウナプラに留まりました。<sup>(490)</sup> ジェータ月の黒半の5日夜、<sup>(491)</sup> 父は息をひきとりました。手前は、今更ながら人の命のはかなさに心をひきしめつつも大いに嘆き悲しんだのでございました。<sup>(493)</sup>

ひと月たつとまた元のように商いに熱を入れることになり、500ムドラーの手形で衣類の仕入れにかかりました。<sup>(494)</sup> そうこうしているところへ再度、サバラシンガ・サーフの書状がとどき、<sup>(495)</sup> それには「お前がいないと帳簿の清算もうまくゆかぬから急ぎ来てくれ」と認められていたものですから直ちに出発しました。<sup>(496)</sup> 衣類のことはシヴェラーマというブラーフマンに依頼して、<sup>(498)</sup> アーサー月<sup>(497)</sup>の吉日にアーグラへ出発したような次第でございます。<sup>(497)</sup> 馬1頭と手下を9人従えて1日目にはガイスワー村に宿をとりました。<sup>(498)</sup> その日、他に1人、馬で来たマヘスリーの

金貸しで、アーグラに住む男が<sup>(509)</sup>手下を6人つれており、それにマトゥラーのブラーフマンが2人、われわれも入れて計19人が道連れになりました。<sup>(500)</sup>旅は道連れと同じところに宿をとり、みな楽しく行を共にしました。<sup>(501)</sup>幾つもの町や村を通り過ぎ、ガータムプラの近くにあるコールラーで<sup>(502)</sup>宿をとり、食事をすませ一休みしました。マトゥラーのブラーフマン2人はアヒールの部落へ出かけました。<sup>(503)</sup>1人が市場へ行き、1ルピーを小銭に替え、<sup>(504)</sup>食物を求めにアヒールの家に行ったところ、<sup>(505)</sup>両替商が追ってきて、「これは贋金だから受け取れぬ」と言い出しました。<sup>(506)</sup>ブラーフマンがそうではない、というので、両者は喧嘩を始め、<sup>(507)</sup>ついには、ブラーフマンが両替商をひどく打ち叩きました。多くの人が仲に入ろうとしてブラーフマンをなだめるのですが、赦そうとはしません。<sup>(508)</sup>そこへ<sup>(509)</sup>両替商の兄か弟かが1人やって来て巧みに言いくるめにかかりました。こやつが全く油断のならぬ下賤な者だったのでございます。<sup>(510)</sup>男はバラモンの着物のすみずみまで調べあげ、隠しに入っていた25ルピーをみつけると居合せた人たちに向かって、<sup>(511)</sup>「みな衆、聞いてくれ。これはみな贋金だ。コートワール<sup>(80)</sup>さまに届け出なけりゃ」と大声を出しました。<sup>(512)</sup>ブラーフマン2人が死人のように黙りこんでしまいますと、男は金をみなにみせびらかしながら、自分の家に戻り、<sup>(513)</sup>そのまきあげてきた金は家におき、贋金をかきあつめ、用意の小袋に入れて、コートワールに訴え出しました。贋金をみせて、<sup>(514)</sup>「お役人、<sup>(515)</sup>騙の一群がこの村に来ております。夕刻ひと所に集まりますから、その折りに馬を召してお取調べにおいてになるのがよろしゅうございましょう」<sup>(516)</sup>と申してひきさがりました。コートワールはハーキム<sup>(60)</sup>にその旨を報じ、ハーキムはディーワーン<sup>(80)</sup>を派遣しました。<sup>(517)</sup>コートワール・ディーワーンともども幽霊のように夕方、町の人400人あまりを引きつれ、手前共の宿におしかけて来ました。<sup>(518)</sup>寝台の上に腰をおろすと役人は、ブラーフマン2人を呼びつけて訊問を始めました。「おまえたちは一体何者だ。」2人は答えて、「われらはマトゥラーのブラーフマン。」<sup>(519)</sup>次にマヘスリーの金貸しを呼びつけて、「お前はいつこより参り、いつこへ行くのじゃ」との間。「こちらは金貸しを生業にするアーグラの住人」とマヘスリーの返答。<sup>(520)</sup>次はバナーラシーダーサの番。「手前は宝石の商いをする者。バナーラスに商いをしたことがあるが、この度はアーグラに赴く途中。」<sup>(521)</sup>ネーマー・サーフと共同商いを致す。家はジャウナプラにあり、少しは名の売れた商人。<sup>(522)</sup>騙呼ばわりは迷惑千万」と申しました。<sup>(523)</sup>すると役人共はペルシャ語で、「こ奴が正真正銘の騙でござろう」「いや商人に相違あるまい」などと言ひ交しておりましたが、<sup>(524)</sup>コートワールが「言い争っていてもはじまらぬ。急ぎ繩をうてばよかろう」と言うと、ディーワーンは「わからぬことを申すものでござる。」<sup>(525)</sup>夜中に盗人か商人かの見分けのつくわけもなからう。夜が明けるまで待てばよかろうものに」と申しました。<sup>(526)</sup>コートワールはそこで手前共に、「汝らコールラー、ガータムプラそれにバリーのいずれかにだれか知り合いの者を見つけるがよい」<sup>(527)</sup>。ただし、この3ヶ所に限るからよく考えてみるがよい」と言い、また朝方来ることを約し、見張り番を四方へ配して立去りました。<sup>(528)</sup>まるで<sup>(529)</sup>法事の夜も同然で、手前とマヘスリーの商人とは呪文を唱えておりました。<sup>(530)</sup>夜も明けかかるという頃にマヘスリーの商人が、「わしの弟のハリ

はここのバリ－村から嫁をもらったので、<sup>(527)</sup> 結婚式の行列に加わって来たことがあったわい」と申します。なぜ、そのように大切なことを忘れておったのかと問いますと、<sup>(528)</sup>「いや、これはあまりの恐ろしさについ失念しておった。もう心配せずによいぞ」と申しました。<sup>(529)</sup> 手前は喜んだものの、一瞬、いや、これは嘘ではあるまいかと不安に襲われたりしておりましたが、<sup>(530)</sup> やがて夜が明けました。機を逸せぬようにと、コートワールは人夫共に処刑台を19台運ばせてきました。<sup>(531)</sup> それを旅籠の側に置いた人夫共は、「これは、おまえたち騙<sup>うづ</sup>の仕置に使うものだ」と言い放ちました。<sup>(532)</sup> 半時間ほどしてコートワールとディーワーンの2人が町の人と一緒にやってきて調べを始めましたので、<sup>(533)</sup> バリ－村に知り合いがみつかった旨を伝えますとディーワーンは「それは結構なことであった。余に従って参れ。バリ－で決着がつこう」と申しました。マヘースリーは馬に乗り、ディーワーンが同行しました。<sup>(534)</sup> 2人はバリ－へ行き、マヘースリーの弟の舅に会って、まことの商人である証を立てました。マヘースリーはそこに留まり、ディーワーンだけが戻って来て、<sup>(535)</sup> 「お前の身の潔白が判明致した。疑って相済まぬ」と言うものですから、手前は、「いや、詫びを申されるには及びませぬ。それがお役人のお務めでございますし、<sup>(537)</sup> 業の報いだけはどうしてもございせん。お役人になんの科がございましょう」と申しました。<sup>(538)</sup> 役人たちは戻って行き、手前も安心しましたが、ブラーフマン2人は、「こちらはまる裸にされてしもうた」と落胆のあまりつつ立ったままでおります。<sup>(539)</sup> そこで手前は9時を過ぎた頃、6、7セールの香油を携え役人のところへ行き、<sup>(540)</sup> ハーキム、ディーワーン、コートワールそれぞれにそれ相應の香油を贈って敬意を表し、<sup>(541)</sup> 「両替商に騙<sup>うづ</sup>られました。どうか奴を捕えてバラモンの金を取り戻してやって下さいませ」と嘆願致しました。<sup>(542)</sup> すると、「それはそちから言われるまでもなく追手を出したが、奴は金をすっかりもって昨日のうちに逐電してしもうておった。<sup>(543)</sup> 手はつくしてみたのだが捕えられなかった。そちは宿に戻って菓子でも振舞うて慰めてやるがよい。この贖金はどうしてもない」との返答。<sup>(544)</sup> そこで手前は、これは尋常のことでは金は手に戻るまい。わしの力の及ぶところでもなし、宿にひきさがる外あるまいと考え、<sup>(545)</sup> 「さようでございますか。もう済んでしまったこと故仕方がございせん」と申して宿に戻りました。事の次第をブラーフマンに話しました。<sup>(546)</sup> 夕刻みな食事を済ませたところへマヘースリーの商人が戻って来ました。その夜は事もなく、<sup>(547)</sup> 夜が明けるとまた元通り旅路につきましたが、まるで死神の口から逃れ出たような心地がいたしました。翌日、ナローツタマが亡くなったとの知らせ。<sup>(548)</sup> 父親のベーニ－ダーサが人に托したその書状を読むなり、卒倒してしまいました。<sup>(549)</sup> その道中での手前の悲しみは、たとえようがございせん。皆がいろいろとなぐさめの言葉をかけてくれるのでございますが、一向に耳をかさず嘆いてばかりおりました。<sup>(550)</sup> まこと、貧欲は罪を、愛着は苦を、不消化は病を、この肉体は死を招くとはよくぞ言ったものでございます。<sup>(551)</sup> ようやくにして心を鎮め、再び馬に乗ってア－グラ－の近くの川岸にさしかかりますと、<sup>(552)</sup> 件のブラーフマン2人は「金を失うては死んだも同然」と言って立ちどまり道を進もうと致しませぬ。<sup>(553)</sup> いろいろ説いてはみたのですが、2人は自害しそうな気配でしたので、手前は思案の末、金を出して決まりをつけ

ました。<sup>○(554)</sup>すなわち、マヘスリーの商人が12ルピー、手前が13ルピー差し出しました。商人2人はブラーフマンから祝福の言葉を授かり身の穢れを取り除いてもらったような次第でした。<sup>○(555)</sup>そこで皆別れ別れになりました。手前は友に先立たれたことが悲しくてならず、独りになるとまた泣き伏したようなことでございました。<sup>○(556)</sup>2時間ほどもしてからようやく自分の仕事にとりかかり、夕食を済ませてサバラシंगा邸を訪れました。<sup>○(557)</sup>

サーフの家に出入りする人は数知れず、一体だれが帳簿をつけるのやらわかりません。栄耀栄華とはこのことを申すのでございましょう。歌い手も列をなし、<sup>バコージ</sup>鼓<sup>ターンディ</sup>や絃を弾く音で王宮のような賑いの中、詩人、吟誦詩人が詩を詠み、<sup>○(559)</sup>多額の喜捨も毎日のこと。その豪勢なさまは筆舌に尽くし難く、だれしも目を見張るばかりでございます。話の取決めは一体どなたのところですか。ものやらと独りつぶやいておりました。<sup>○(560)</sup>2、3ヶ月の間、出入り致してみましたが、まあ、なんという商いでございましょう。勘定のことを申せば、いや、それは明朝に、との決り文句。<sup>○(561)</sup>世間一般でいうひと月がここでは半時間、半年が3時間<sup>ジーム</sup>にしか当たりません。世間の1日はここでは一体どれだけの時間になるのやら。ともかく太陽の沈むこともあろうかと思うほど悠長なものでございます。<sup>○(562)</sup>そうこうしているうちに、かなりの月日が流れました。そのようなある日、ベーニーダーサの叔父アンガーサーフが訪ねて来ました。<sup>○(563)</sup>アンガーサーフはサバラシंगाの姉婿にあたる方ですが、なかなかの人柄で、手前も親しくしていただいております。<sup>○(564)</sup>手前とナローッタマの外舅が困っており、<sup>○(565)</sup>決まりをつけていただくようお願いすると、<sup>○(566)</sup>その日のうちにサバラシंगाのもとへ行き帳簿を取り寄せ、清算書を書かせ、<sup>○(567)</sup>後で話しのもつれぬよう誓文を取り交わさせて下さいました。<sup>○(568)</sup>そこでまた手前は自分独りになりました。時に1673年(1616A・D)はアグハン月の黒半の頃でございます。<sup>○(569)</sup>1軒家を借り受けました。ところが間もなく善根の果が現われました。件の預けておいた衣類をブラーフマンが約束通り送り届けてくれました。<sup>○(570)</sup>ジャウナプラから届いたその品は元手に足して毎日市に行っては売りさばきました。<sup>○(571)</sup>さて、この年、アーグラは災厄に見舞われ、疫病が流行ったものですから皆あちこち田舎へ逃げ出しました。<sup>(81)</sup><sup>○(572)</sup>この病に罹ると、体の節々がこわばったかと思うと即刻息が絶えてしまい、施す術がございません。ねずみが死に、<sup>バイグ</sup>医者が死に、人は恐れて食事もとらぬほどでございました。<sup>○(573)</sup>手前はアーグラ近くのブラーフマンの村、アジーザプラという所へ行きサーフの家の近くに宿をとりました。<sup>○(574)</sup>独りで暮していたのですが、内証のことはやはり申し上げますまい。前業の果があらわれて邪念にとりつかれたのでございます。<sup>○(575)</sup>疫病<sup>ベスト</sup>もおさまりみなそれぞれ市中に戻り始めましたので手前も家に戻りました。それからしばらくしてアマラサラを訪れました。<sup>○(576)</sup>同地でニハーラチャンダの結婚式が行われたのでした。またアーグラに戻ると、サバラシंगाのもとへ出入りしました。<sup>○(577)</sup>

ジャウナプラに居た母はアーグラの手前のもとへ移り住みました。手前は二度目の祝言にカイラーバーダへ行きました。<sup>○(578)</sup>式から戻ると巡礼に行きたいと願っているところへ、バルダマーナ・クンワラジーという仲買人<sup>グラール</sup>が巡礼団を募ったものですからそれに加わりました。<sup>○(579)</sup>アヒチャ

ター、<sup>(82)</sup><sub>(380)</sub>ハタナープラ<sup>(83)</sup>に詣でるために手前は朝早く起きて母と家内とを連れ、車に乗って出かけました。1675年(1618A・D)もパウシャの月の吉日にアヒチャッターに詣で、次にハタナープラに行きシャーンティナータ、クントゥナータ、アラナータを拝みました。<sup>(381)</sup>巡礼をおえた心に満足をおぼえました。一行はデリーに向かい途中メーラタに出ましたが、そこには母方の祖父の家がございました。城の下で一行と別れてそれから先は家族ばかりの旅となりました。やがてコールへ出てお祈りをし、誓いをたてました。<sup>(385)</sup>それからアーグラのわが家に戻りました。手前はまたポーサールへ行き、ヤティやシュラーヴァカの戒律について教えていただきました。<sup>(386)</sup>十二の誓戒<sup>(88)</sup>の句をきいて、心に深く念じ、常に十四の戒律をまもり、過ちがあれば償いの行を致しました。<sup>(387)</sup>毎夕、パリコウナーを行ない、日毎に戒も厳しさを増し、ジナの教えをしっかりとまもり邪惡な考えを捨て去っていきました。この間に男児を授かりましたが、<sup>(388)</sup>Vi. 1676年のアーサール月のことでございました。信心も一そう深まるうちに、1年後のVi. 1677年に母が亡くなりました。<sup>(389)</sup>追善供養にと出来るだけの贈物を致しました。つづいてVi. 1679年には、妻子もろとも亡くなりましたので、その同じ年に妻子の供養と三度目の婚約とが重なったようなことでございました。<sup>(390)</sup>Vi. 1680年にはカイラーバーダへ三度目の挙式に参り、ククリー・ゴートラのベーガーサーフの娘を娶り、また結婚生活に入ったのでございました。<sup>(391)</sup>

その頃、アラタマラ・ドーラというアド્યートマに熱心な人と知己になり親しく交わるようになりました。この方は、『サマヤサーラ・ナータカ』のラージマッラの註釈書を書写して下さり、<sup>(392)</sup>「これを読まれるがよい。真諦<sup>サーンタヌ</sup>とはなにかがわかろう」と申されました。<sup>(393)</sup>そこで手前は絶えず読みかえしては一語一語を味わってみたのですが、アド્યートマの奥義は理解できずにつまらぬ戒行に執着しておりました。<sup>(394)</sup>ところが、それにすら熱が入らなくなり、満ちたりたものを心に感ずるでもなく、ちょうど駱駝の尻のように天のものとも地のものともつかず宙に迷ってしまったような有様でございました。<sup>(395)</sup>一体どこまでお話し致せばよろしいのでしょうか。正行を捨て去り、賤しい考えにとりつかれていたと申しておきましょう。<sup>(396)</sup>考えよからぬ者共4人、意気投合したとあっては、だれか1人をつかまえてターバンをぬがせた頭を他の3人が履物で叩くといったパイジャールの遊びをしったりしておりました。<sup>(397)</sup>4人と申しますのは、チャンドラバーナ、ウダイカルナ、ターナ、それに手前のことで、ふざけるのも「アド્યートマ」を学ぶのも皆一緒に致しておりました。<sup>(398)</sup>4人は真裸になって「ムニ・ラージャだ。なんの執着もない」と言っでは家の中を歩きまわり、<sup>(399)</sup>大声をあげたり、叩き合いをするなどしておりました。前世での業果があらわれ、またかようなことをするようになったものと存じます。だれの言葉にも耳をかさず、よからぬ考えにとりつかれていたのでございます。<sup>(400)</sup>業果の尽きぬ限り、それは如何ともなし得ぬことで、その尽きるのを待つより他に手立てはございません。その極に達してからは悪ふざけも消えてなくなったのでございます。<sup>(401)</sup>シュラーヴァカやヤティたちは手前のことをくわせ者ときめました。それというのも他の3人と違って手前は学者ということで世間にも知られていたものですから、とりわけ非難されることになったのでございます。<sup>(402)</sup>人はみな他人を真

似て、悪口を言ったり、ほめたり致すもので、とかく黙ってはおれぬものとみえます。<sup>○(602)</sup>聞き知ったこと、見たこと、あるいはつくり出したことを勝手に言いふらす連中には手のつけようがありません。<sup>○(610)</sup>ところで熱にうかされていた状態からは脱け出しましたがまた様子が変わり、心の中ではジナの像を侮り言うべからざることまで口にするようになりました。<sup>○(611)</sup>師の前では戒<sup>バラ</sup>を誓い、家に戻ってはそれを破り、日夜畜生の如く喰らっては独り浮かれておりました。<sup>○(612)</sup>このような調子が日毎に高まるうちに Vi. 1684年(1627A・D)のアーサーラ月になりました。<sup>○(613)</sup>三度目の妻は初めて男児を産みましたが、その児は数日すると息をひきとってしまいました。まことにはかない露の命ではございます。<sup>○(614)</sup>

デリーのジャハーンギール大王は22年に亘り世を治められたのですが、カシュミールからの御帰途、急死されたので、<sup>○(615)</sup>4ヶ月後、シャージャハーン・スルターンがアーグラの王座につかれるとの御布令が出ました。Vi. 1684年(1628A・D)のことでございます。<sup>○(616-617)</sup>

Vi. 1685年、妻は再度男児をもうけたのですが、<sup>○(618)</sup>その子は2年に満たずして亡くなってしまいました。どの子も短い寿命のなせるところ、生まれてきては去ってゆくのでございます。Vi. 1687年には、<sup>○(619)</sup>3人目の男児が、また1689年には女兒が生まれましたが、いずれも短い寿命が尽きてしまいました。<sup>○(620)</sup>どの子も生まれおちてはすぐに亡くなってしまい、ただ1人生きながらえた男児も短命なのに変わりはありませんでした。<sup>○(621)</sup>かくして Vi. 1691年もすぎ1692年となりました。この年手前はようやく以前のように心に平静を取り戻しました。<sup>○(622)</sup>かくして Vi. 1692年(1635A・D)まで真諦観のみに依り詩作にふけりました。それはみなスヤードヴァードとパリマーナ<sup>(99)</sup>を詠んだものでございました。<sup>○(623)</sup>たまたまその頃アーグラにルーパチャンドラという学僧<sup>パンジナ</sup>がおいでになりました。師はティフナーサーフが造営された寺院にお泊まりになられたのでアドチャートマの徒はより集まって『ゴーンマタ・サーラ』<sup>(92)</sup>を読んでいただくことに致しました。<sup>○(631)</sup>人はその徳<sup>グネスターナ</sup>階に従って振舞うことや、<sup>○(632)</sup>内に真諦観、外に俗諦観<sup>デフラー</sup>ということをし、いろいろ詳しく説明なさいました。それを耳にして手前は迷いからすっかり目を覚まされました。<sup>○(633)</sup>かようなわけで手前はジナの教えに没頭し、これまでとは見違えるようになりました。ルーパチャンダ師から書を習い、心に落着きを感じずようになったのでございます。<sup>○(634)</sup>2年もせぬうちに師はお亡くなりましたが、師の教えを幾度も繰返し耳にして手前も篤信のジャイナ教徒となったのでございました。<sup>○(635)</sup>そこでまたアドチャートマの教えを詩に詠みこんだのでございました。<sup>○(636)</sup>心眼をくもらせていた汚れも信仰のおかげですっかり洗いおとされ平等心を得たのでございました。<sup>○(637)</sup>Vi. 1696年、次に生まれた男の子が亡くなったものですから、悲しみのあまり心の平静もなくなっていました。<sup>○(640)</sup>この世に妄執ほど恐ろしいものはございますまい。これは知者と愚者との差すらなくしてしまうものでございます。かくしているうちに2年が過ぎ去ったのですが、妄執を追い払うことは出来ません。<sup>○(641)</sup>これまで55歳に至るまでのことを申したのですが、子供は女兒を2人、男児を7人授かり、<sup>○(642)</sup>3人もの妻を娶ったのですが、木の葉の落ちた枯木のように9人の子すべてをなくし残ったのは夫婦2人という有様でございます。<sup>○(643)</sup>真諦を見きわめて執着がなくなれば心

には平静を得ます<sup>○(644)</sup> 俗人はそれを知らず、執着があればこそ心おごるというものでござい  
す<sup>○(645)</sup>

次に己れの長所短所を申してみましよう。アーグラの都に妻と二人仕合せに暮らしておりま  
すが、<sup>(646)</sup> アドヤートマの詩においては手前に並ぶ者はございせん。寛大な心、常に満足をわきま  
え、詩を誦するのが巧みでございす<sup>○(647)</sup> サンスクリット、プラークリットを正しく読み、多く  
の地方語を解し、言葉の奥義にも通じております。またこの世の苦を氣にやむではなく、<sup>(648)</sup> 言葉  
遣いは丁寧で人には親しく接し、ジャイナ教を堅く信仰しております。また、忍耐強く、口を慎  
しみ、心は惑うこともございせん<sup>○(649)</sup> だれにも有益なことを語り、心は全く清浄で、色欲に己  
れを忘れることもございせん<sup>○(650)</sup> かようによごれなき心(?)など数多くの長所がございましょ  
うが、それらはいずれも瑕が少ないのみで完全無欠なものは一つもないのでございす<sup>○(651)</sup> 次に  
長所同様、短所も数えてみましよう。忿怒、慢心、迷妄にとられることはほとんどございませ  
んが、金<sup>ラクシュミ</sup> 銭への執着が特別強く、<sup>(652)</sup> (?) 唱名、戒行、節制につとめず、布施、祈禱に熱が入  
りません<sup>○(653)</sup> 僅かばかりの利益に馬鹿喜びをするかと思えば、ほんの僅かの損失にふさぎこむこ  
ともございす。口にしてはならぬことを平気で言ったり、熱心に判間の真似を致したり、<sup>(654)</sup> 内  
証のことまで話してしまい、独りでいると踊り出し、見もせぬこと、聞いたこともないことを大勢  
の前で馬鹿げたつくり話にしてしゃべったり<sup>○(655)</sup> 可笑しいことには酔いしれてつくり話をせず  
には居れぬかと思うと、不意に自責の念にとりつかれたり致します<sup>○(656)</sup> 長所にしろ短所にしろそれ  
はみな因縁あってのこと故、如何ともなし難いものでございす。ここに申しましたのがバナ  
ーラシーダーサの身の上話のあらましでございす<sup>○(657)</sup> 思い出すままを綴ったわけで、詳しく御存  
知なのは神<sup>バガワンタ</sup> 様だけでございす<sup>○(658)</sup> ここに申し忘れたことはいかようにも申せぬことで、それを  
語る人がいるとすれば聖のみでございましよう<sup>○(659)</sup> 人間の日日の暮らしには実に様々なことが生  
じます故、たとえそれをすべて知っている聖にも正確には語れぬものでございす<sup>○(660)</sup> 55歳に至  
るまでのわがことを申し上げてみましたが、これから先に何が待っているのやら人の身にはわか  
るうはずもございせん<sup>○(661)</sup> 今が55歳でございすからあと55年は人間の寿命として残っている  
ことになりましよう。(?)<sup>(662)</sup> 人壽は110歳と申します。今年はヴィクラマ暦で1698年(1641A・D)  
でございす<sup>○(663)</sup> この世の人間を分けてみるならば、上、中、下の3つに分けられるかと存じま  
す<sup>○(664)</sup> 他人の徳はたたえるが、欠点には目をふさぎ、己れの長所は語らず欠点のみを語る人がお  
れば、その人は最上の人<sup>○(665)</sup> 他人の長所も欠点も、また己れのことも同じように話す人は手前の  
ような中の人<sup>○(666)</sup> 常に他人の欠点をあばき、長所を見ても気づかぬふりをし、己れの欠点はかく  
しおき長所のみを語るのは下の下の人<sup>○(667)</sup> Vi. 1698年アグハン月の白半の5日(日曜日)<sup>(668)</sup> ア  
ーグラの住人、シュリーマラーのジャイナ教徒、バナーラシーダーサ・ビホーリヤーと申す敬虔  
なアドヤートマの信徒が<sup>(669)</sup> 55歳までの身の上話を語ろうと、思いつくまま申してみたのでござ  
いす<sup>○(670)</sup> これから先にもいろいろ感ずることもございましよう。人壽を110歳とすれば<sup>(671)</sup> これ  
は手前の半生記ということにまりましよう。悪党共はこれをきいてあざ笑うことでしょうが、友人



たちは耳傾けてくれることと存じます。(674)

## 奥 附

ヴィクラマ暦1849年(1792A・D) シュラーヴァナ月の黒半の14日(火曜日) バガワーンダーサ筆  
写。ラーマ(南無)。

## 付 記

本抄訳のテキストとしては Nāthūrām Premi(ed.), *Ardha Kathānaka* (2nd ed., Bombay, 1957) を用いた。なお, Mātāprasād Gupta, *Arddha Kathā* (Prayāg, 1943) を参照した。紙面の都合で訳者の判断により抄にしたほか、適宜に段落をつけた。

## 註

[80] Kotwāl, Hākim, Diwān—Kotwāl は本来都市における警察の長であり, Hākim はスーパーダールの補佐官として治安・行政の両面に働いた Faujdār のことと考えられる。Diwān はスーパーにおける財政面の責任者と考えられるが, ここでは Hākim と並び不明確に用いられており断定できぬ。→J. Sarkar, *Mughal Administration* (510, 515)

[81] Mari—これは Vikrama S. 1673年(1616A・D)に流行したが, (573)の「ねずみ…」という記述からもペストであることは明白である。また, これは, Wākiāt-i-Jahāngirī にも言及されている。[Elliot & Dowson, *The History of India as told by its own historians*, Vol. VI, p. 346] (572)

[82] Abichattā—U. P 西北部 Bareilly の西方約30kmにあるジャイナ教聖地。(580)

[83] Hathanaṇṇapura —Meraṭh 近くの Hastinapura のことで, ジャイナ教第16代ティールタンカラの S'antinātha, 第17 代の Kunthunātha 及び第18祖 Aranātha の誕生地である。(580)

[84] Bisasena (Viśvasena)—S'antinātha の父の名, Sūra (Sūrya, ないしは, S'ūra)—Kunthunātha の父の名, Sudansana (Sudarsana)—Aranātha の父の名。同様に Acirā, sirīā (S'rī Devī), Devī (Devī, もしくは, Mitrā) はそれぞれのティールタンカラの母の名とされる。(583)

[85] Sāranga, Chāga, Nandāvata—上記の各ティールタンカラの有する標識とされ, Sāranga とは鹿, Chāga は牡山羊, Nandāvata (Nandyavarta) は魚。(583)

[86] Cālisa, paintisa, tisa—それぞれ各ティールタンカラの身の丈とされている数で, 単位はダヌシャ (Dhanuṣa)。1 ダヌシャは腕尺の4倍の長さ。(583)

[87] Chabi kancana—各ティールタンカラの皮膚の色で, いずれも金色。(583)

[88] Bārāha Brata—ジャイナ教において俗信徒の義務とされているもののうち次の12の誓戒をさす。(1). 5 種の Anuvrata (①殺生②虚言③窃盗④不品行⑤食欲を避けること), (2). 3 種の Guṇavrata (①行動範囲を慎むこと②快楽の制御③中庸を保つこと), (3). 4 種の S'ikṣāpadvrata (①平等心をもつこと②居住区域の制限③罪業の浄化④正しい接客)。(587)

[89] Bibahāra-atīta—これはジャイナ教で, 精神原理ジークヴァを有染化しない純粋な実体として観察する真諦 (vyavahāra-atīta, Nis'caya-dṛiṣṭi) をさすものであり, これに対し, 業に繫縛された有染我としての機能を観察するのが俗諦観 (vyavahāra-naya) である。(595)

[90] Syādavāda-paravāna—syādavāda とは相対主義, あるいは, 否定主義と訳されるが, 事物に関

して正しい認識を得るためには多面的な見方，あるいは，表現法をとるべきであるとするジャイナ教の立場をさすものであり，paravāna とは parimāna のことで，認識の手段をさす。(629)

[91] Gommatasāra—空衣派の学僧 Nemicandra (10世紀末—11世紀初) の著。(631)

[92] Guna-thānaka—Guṇa-sthāna のことで，ジャイナ教で靈魂が究極の解脱に至るまでの状態を14の段階にわけたもの。(632)

[93] Antara niyata bahira bibahāra—「内に真諦観，外に俗諦観」の意。(633) [89]参照。